

中華民国における大学野球の現状報告

——経済発展にともなうスポーツ大衆化への動向——

田中亮太郎

はじめに

軟式野球は日本の野球発展の中で誕生した日本のスポーツ文化と言える。全日本大学軟式野球連盟軟式の部では、そのスポーツ文化の海外普及・発展と戦後50年に際し次世代を担う学生達がスポーツを通じて国際交流をはかることを目的として平成7年11月に全日本代表選手団（役員・選手、総勢60名）が台湾（正式国名は中華民国）に渡航し国際親善試合を実施した。全日本代表選手団の親善試合並びに交流に関しては、台北駐日経済文化代表處（国交があれば大使館）の林金莖代表（大使）に御支援・協力をいただいたおかげで、私立中国文化大学・台北市立體育專科学院という台湾大学野球界を代表する強豪チームと対戦出来ただけでなく、中華民国外交部の房政務次長（日本なら外務省政務次官）・台北市の陳市長・大專院・棒球協會・文化大学等を訪問し心温かい丁寧な歓迎を受けることとなった。そうした中、軟式野球の普及・発展を進めると共に信頼と友情を深めることができた。今回、全日本代表選手団に役員として参加する中で、台湾野球界を様々な角度から眺めると、台湾の政治改革や経済発展・国際関係などが野球人気や台湾スポーツ界のナショナリズムの台頭などと密接な関係にあることが理解できる。本文では、このような台湾の大学野球界の現状を報告する。

日程

11月23日（木）

午後5時

東日本選抜チームホテルレッツ成田集合

西日本選抜チームナンバプラザホテル集合

11月24日（金）

午前10時過ぎ

成田国際空港（東日本）、関西国際空港（西日本）より台北へ出発

現地時間午後2時過ぎ（以下現地時間）

台北桃園国際空港到着、諸手続き後入国。

市内視察（忠烈祠、圓山大飯店など）を経てホテル六福客棧（THE LEOFOO）到着。

午後6時30分

歓迎パーティー

全日本選手団・中国棒球協會役員・サンケイ新聞台北支局長・同顧問・中国文化大学体育局教授陣・中国文化大学野球部選手・台北體育專科学院野球部選手など約130名による歓迎交流会であった。

11月25日（土）

台北新生野球場にて親善試合

第一試合 東日本選抜 4-4 台北體專

第二試合 西日本選抜 9-1 中国文化大学

第三試合 西日本選抜 3-6 東日本選抜

11月26日（日）

台北新生野球場にて親善試合

第一試合 西日本選抜 4-5 台北體專

第二試合 東日本選抜 23-0 中国文化大学

第三試合 東日本選抜 2-9 西日本選抜



新生野球場での親善試合 公園の向こうには 有名な円山大飯店
と「国家建設六年計画」による高速道路建設工事が進行中である

11月27日(月)

午前

中華民国外交部表敬訪問

房 金炎 政務次長と会談

午後

台北市長表敬訪問

陳 水扁 市長による歓迎レセプション

中華民国棒球協会表敬訪問

中華民国大專院表敬訪問

11月28日(火)

午前

中国文化大学訪問

張 鏡湖 理事長による歓迎レセプション

午後

市内視察 (故宮博物院見学)



市内視察 中国四千年の芸術の宝庫 故宮博物館見学

11月29日(水)

午後2時過ぎ、

台北桃園国際空港を飛び立ち成田国際空港・関西
国際空港を目指して帰国の途に就く。

午後6時過ぎ

無事、入国手続きを完了し選手団解散。

日本と台湾の関係

台湾は、人口約二千百万人・国土面積は約三万六千方キロ(日本の九州より少し小さい。)である。日本から成田・関西国際空港から約三時間弱の近い位置にありビジネス・観光等で年間約百五十万人の相互往来が有り、両国間の年間貿易額は三百二十億ドル(三兆五千億円)を超える規模に達している。日本と台湾の関係は数字的には経済・文化交流の深い国であると言える。しかし、政治的には1972年に国際連合が中華人民共和国の加盟を承認する国際情勢の流れの中で、日本政府も大陸の中華人民共和国と国交を結び中華民国と断交して以来、政治的には正式交流の無い両国の関係である。

日本と台湾の関係は歴史的に見ても深い関係がある。日本において台湾の存在は高砂国・高山国としてかなり古くから知られていたらしい。1895年日清戦争の終結による下関条約の締結で台湾は日本政府の統治下に置かれることとなる。以後、日本が第二次世界大戦の敗戦により台湾が中華民国に返還されるまでの五十年の間、日本の植民地政策を受けることとなる。日本の植民地政策の方法は同化政策で、その住民に言語・生活習慣など直接日常的に反映してくるから、その苦痛は忍びないものがあると考えられる。独立運動を武力弾圧したのも歴史上の事実である。植民地政策の是非善悪を論ずることは難しいが、歴史の事実と認識して親善交流に臨んだが、台湾国内に反日感情の残る中、今回台湾で出合った人達から、戦後の台湾の経済発展の基盤は日本の植民地政策で組織的な教育の普及により国民の知的水準が極めて高いことが上げられると聞いた時、少し心が救われる思いであった。

国際社会と台湾の関係

第二次世界大戦後、中華民国政府の国民党が共産党による相次ぐ内乱の制圧に失敗した結果、1949年に中央政府を大陸から台湾に移転してきた。そうした結果、1971年には大陸に新しく誕生した中華人民共和国が中華民国に変わって国際連合の常任理事国となり、国際的地位は逆転することとなり、国連脱退を余儀なくされ国際社会から孤立していった。現在、政治的には日本・アメリカ・ドイツ・フランス・イギリス等の世界の経済先進国とは正式な国交は結ばれておらず、東南アジアの近隣諸国を中心に約三十か国と国交が有るに過ぎない。

台湾は、複雑な国際政治の渦中に置かれ政治的交流では孤立しているが、経済的交流では国際経済に影響を与える素晴らしい活力を世界に誇ることが出来る。94年度の台湾経済は、GNPは二千四百四十二億ドルで世界第二十位、一人あたりの国民所得は一万一千六百二十四ドルで世界第二十五位、台湾の対外貿易は一千七百六十四億ドルで世界第十三位、外貨準備金は優に一千億ドルを超えて、日本に次いで世界第二位という膨大な外貨準備金を持っている。台湾の対外投資は活発でベトナム・マレーシア・フィリピン・タイ・インドネシア等の東南アジア諸国連合（ASEAN）を中心に総額二百六億ドルに達し世界第十二位を占めている。経済成長率も6.51%に達し近年は6%台を維持し安定した高度経済成長を遂げている。そうした経済成長に伴い、台湾の国際機構への参入の声も世界的に高まりつつある。例えば、アジア開発銀行（ADB）やアジア太平洋経済協力閣僚会議（APEC）への加盟はすでに認められた。関税・貿易一般協定（GATT）への加盟も、近々認められる可能性である。こうした国際社会の潮流の中で台湾政府は、国際連合への復帰を最重要目標としている。復帰問題に関して国際連合加盟国の中でも年々支持国数が増加しており、近い将来に復帰が認められるのではないかと考える。こうした世界的動向の背景には、国際社会における経済的影響力だけでなく民主主義国家として国際社会に認められてきたことも大きな要因と考えられる。国民党の一党独

裁体制から民主政治への改革が急激に進められたからと言える。94年12月に地方の行政長官である台湾省長・台北市長・高雄市長の選挙が実施された。各選挙で激烈な選挙活動が展開されたが、首都の台北市長選挙では野党の民進党候補である陳水扁が当選した。これは選挙が民主的に実施された結果と言える。95年12月には立法委員選挙（日本の国会議員選挙）が実施され、国民党が辛うじて過半数を確保し政府与党の立場を守ったが、野党第一党の民進党の進出も大きい。96年3月には台湾で初めて実施された国民の直接選挙によって国民党候補の李登輝が初代の民選総統に当選した。こうした各選挙が民主的に実施されたことにより、台湾の政治民主化の大改革が国際社会に示されたのである。

軟式野球の普及、なぜ台湾へ

戦後、日本国内におけるスポーツの発展・成長過程において国内の経済成長と民主主義思想の定着が互いに関与しあいながら発展したことが大きな要因としてあげられる。そうした中でも軟式野球が昭和30年代に急速に発展していったのには日本国内の野球人気によるものである。それは戦前からのプロ野球・神宮の大学野球・甲子園の高校野球などに象徴される。経済成長と民主主義の確立に呼応して「見て楽しむスポーツ」から「プレーして楽しむスポーツ」に変化していったからである。生活の安定・余暇時間の活用からスポーツの大衆化が始まり生涯スポーツへと発展していった。

台湾においてスポーツ大衆化の波が起きようとしている。政治の安定・民主化、経済発展による生活の安定等、スポーツ大衆化への条件が整いつつ有る。野球は戦前の日本統治下時代に台湾に紹介されており、その発展要素としては古くから定着していた。80年代には硬式野球のオリンピック種目化とともに野球熱が急激に高まり、国威発揚の時とナショナリズムが台頭してきた。大学野球・社会人野球で組織するナショナルチームのレベルは高く、常にメダル候補の実力である。こうした流れの中で89年には台湾初のプロ野球リーグとして「中華職棒連盟」（直訳すると中華プロ野球連盟）が六球団を持って発足

した。その人気は高く、大学野球・社会人野球の選手たちの中には、プロ野球候補が目白押しである。小・中学生の野球熱も大変高く、クラブ組織で活発に行われており、その競技レベルは世界のトップクラスで、将来のプロ野球界のスターを夢見ている。プロ野球やオリンピックとスター選手に憧れ「見て楽しむ野球」から「プレーして楽しむ野球」へと転換していくだろう。そうした中で確実に軟式野球が普及していくだろう。

親善、戦争を知らない第二世代、新人類の交流

胸に「JAPAN」の文字刺繍と「日の丸」つきのユニフォーム、野球選手なら一度は着たい日本野球界の全日本代表チーム用の公式ユニフォームである。親善試合では、監督・コーチ・選手が一丸となって胸の国旗・国名に自信と誇りをもってハイレベルの技術とマナーを随所に発揮してくれました結果、予想以上の好成績を上げることが出来ました。全国各地から選抜し、出発前のたった二日間の合宿練習で連係プレーが出来るかどうか不安一杯の試合開始であったが、個々の選手が全日本代表という自信と自覚を持って最大限の力を発揮してくれた結果である。さわやかなプレー、さわやかなマナーは台湾の選手たち、審判の皆さん、観戦いただいた皆さんに感動を与え、軟式野球というスポーツの魅力が持つ吸引力で友好を深めることができた。

選手団にもう一つのユニフォームが有る。表敬訪問や移動用に着用した、胸に「日の丸」つきの紺色のブレザーにグレーのストラックスである。野球のユニフォームには逞しさを感じさせる選手たちであったが、「日の丸」つきのブレザーには恥じらいがあるようであった。台湾に向かう飛行機の中、「日の丸」を見た日本人乗客から何の選手団か質問され、恥ずかしそうに答える選手たち、「頑張れ日本」の声援に照れながらお礼を言う選手たち。そうした声援が選手たちに全日本代表の自信と誇りを与えてくれたものと役員一同感謝している。

目的の一つに親善交流がある。神崎団長以外の役員は戦争を知らない世代であるが、選手たちは戦争を知らな

い第二世代である。台湾と日本の第二世代の交流が二十一世紀を目指した友好の始まりである。

台北市到着の夕刻、ホテルレストランで歓迎パーティーが開催され、役員・選手とも少々緊張気味で臨んだ。北京語と日本語が入り乱れ、実に賑やかである。役員は台湾側の出席者が上手に日本語を話されるので話が弾んだが、第二世代の選手たちは北京語と日本語に身振り・手振りを加えて、片言の英会話と筆術で大爆笑、一気に友好を深め、台湾滞在中は毎晩交流会を開いていたようである。これぞまさしく新人類の交流である。

今回多くの機関を表敬訪問したが、どこにいても心温かく迎えていただいた。そのなかでも中華民国外交部（日本の外務省）と台北市庁を訪問した際には、役員・選手一同感激であった。外交部へは、役員と学生役員の



房 金炎 政務次官（中央）を囲んで役員と記念撮影

十名が訪問したが、あいにく立法委員選挙運動（日本の国会議員選挙）期間中で正門前には約八百人のデモ隊と約五百人の機動隊とがにらみあうなかの訪問で、台湾の民主化に真剣に取り組む国民パワーに驚かされた。第一世代の役員たちには学生運動のパワーがあったが、今の学生たちにはどんなパワーが潜んでいるのかと考える。外交部では大理石造りに赤いジュータンの廊下を案内され応接室に、房 金炎 外交部政務次長（日本の政務次官）に温かく出迎えていただいた。房 次長は、先に大阪で開催された APEC に出席され帰国されたばかりで、お疲れの残るなかにもかかわらず約一時間の会談をいただいたことに感謝する次第です。台北市庁は東京都庁に勝るとも劣らない超近代的建物で選手団全員驚くばかりで

あった。レセプションルームへ案内されると報道陣のカメラの列にまた驚き、緊張して席に着くと 陳 水扁 市長に温かく迎えていただいた。公務多忙にもかかわらず一時間を越す歓迎レセプションを開いていただいたことに感謝する次第です。房 次長、陳 市長ともに軟式野球の普及と第二世代の友好交流に協力の約束をいただきました。あらためて胸の「日の丸」の重みを感じる表敬訪問であった。



台北市の歓迎レセプション 陳 水扁 市長より記念品を頂く

大專院（正式名称は社団法人中華民国大專院校体育總會）は中華民国教育部（日本の文部省）の指導下で台湾の大学の体育活動を総括する組織で、全国の総合大学・獨立学院（日本の単科大学）・軍警学校（日本の八官庁の学校）・専科学校（日本の短期大学）の 137 校が加盟しており、競技種目別に 25 の委員会で構成されている。棒球（野球）委員会には硬式野球の約 40 大学が参加し、競技レベルで甲組・乙組・五專組に別れ、今回対戦した大学は甲組（4 大学所属）の強豪チームであった。棒球協會は、社会人野球・大学野球から少年野球まで台湾の野球界を総括する組織で、今回の親善試合に窓口になって準備をしていただいた。大專院・棒球協會とも今後の交流と軟式野球の普及・発展に協力の約束をいただいた。

台湾の大学野球界の将来について思う

大学野球界の発展にはスポーツ大衆化への条件整備が不可欠なことは言うまでもない。国際政治面においては中華人民共和国との問題に関して国際政治の渦中におか

れ困難な状況が続くだろうが、国際経済面での躍進と国内政治の民主化への改革により国際社会における台湾の評価は益々高いものになり、経済のみならず政治交流も進展していくと思われる。国内的にも「国家建設六年計画」により高度経済成長は継続し、政治面でも民主化改革は確立段階に入ろうとしている。政治の安定・民主化、生活の安定など条件は益々整うことと思われる。そうした安定に追随してスポーツ施設などを中心としたスポーツ環境整備が今後進むものと思われる。その現象として、96 年 5 月に台湾プロ野球界に新リーグが誕生した。「台湾職棒大聯盟」（直訳すると台湾プロ野球大リーグ）でノンプロ野球（企業内の社会人野球）から 4 チームがプロに転向する。台湾ノンプロ野球界は、「アトランタオリンピック優勝」を目指していたが、昨年 9 月に行われたアジア予選で敗退し夢が消え去ってしまった。国家の成長と共に台湾野球界にもナショナリズムが台頭したが、プロ野球の発展と共に選手のプロ野球志向が強くなり、ナショナリズムも薄らいでいく傾向にあると思われる。そうした傾向の影響を受けて、大学野球界もプロ野球予備軍的な傾向が強まるのではないかと懸念する。

最後に

今回の親善試合において目的であった軟式野球の海外普及・発展に関しては、台湾に小さな芽ではあるがしっかりと植えつけられたことと思う。この小さな芽が大きく育つことを願う。もう一つの目的であった友好交流に関しては、戦争を知らない第二世代が十年後、二十年後と、台湾と日本の平和と友好をより大きく成長させてくれることを夢見る。

今回、駐日経済文化代表處の林 金莖 代表をはじめ多くの方々に御支援・御協力を賜り心より感謝するしだいです。また、全日本代表選手団の役員として派遣に御理解をいただきました塚本学院に深く感謝すると共に、末筆ではございますがお礼申し上げます。